

この世界では、男性も「カントボーイ」として女性器を有しており、リラクゼーションサロンでの「膣マッサージ」は一般的なメディカルサービスとして社会に定着している。

健康保険が適用される正規の医療行為として、雑誌や電車の中吊り広告にも「血流改善・骨盤内洗浄コース」の文字が並び、街のあちこちに専門サロンが軒を連ねていた。

俺—佐伯健太郎、二十九歳、都内の広告代理店で働くしがたい中間管理職。連日の深夜残業と休日出勤で腰はバキバキ、目の下の隈は常駐し、肩は石のように凝り固まっている。そんな俺を見かねた上司が、名刺サイズのカードをデスクにそっと置いた。

「佐伯、たまには自分の身体を労われ。ここは会員制でちょっと高いが、保険が効く。何より、お前みたいな凝り性には特に効くらしいぞ」

疲れきっていた俺は、深く考えもせずにそのカードを手に取り、翌週の土曜日、半信半疑でそのサロンの扉をくぐった。

サロンの自動ドアを抜けると、外の喧騒が嘘のように消え、ラベンダーとユーカリの落ち着いたアロマが鼻腔をくすぐる。淡い間接照明に照らされた白を基調とした内装、高級ホテルのロビーを思わせる静謐な空気。受付の女性は完璧な笑顔で俺を迎え、施術着へ着替えるよう案内した。

個室に通され、紙のような薄い施術着に袖を通す。少し肌寒い。ベッドにうつ伏せになると、ほどなくしてノックの音がし、担当施術師が入室してきた。

「初めまして。本日ご担当させていただきます、神崎と申します」

低く落ち着いた、耳に心地よい声。ちらりと見えた姿は、長身で肩幅の広い、モデルのような男だった。白衣の下は筋肉質な身体。彫りの深い顔立ちに、眼鏡の奥の切れ長の目が優しく細められる。

（男か……まあ、整体だしな……）

俺は少し緊張しながらも、うつ伏せのまま「よろしくお願いします」とだけ言った。

「それでは、まず背中と腰の筋肉をほぐしていきますね。肩甲骨のあたり、かなり張っていますよ」

温かいオイルをたっぷりと含んだ手が、肩から背中へ、そして腰へとゆっくりと下りていく。ぐ、ぐ、と凝り固まった筋肉が解れていく感覚に、俺は思わず深い息を吐いた。これだけで十分に気持ちいい。確かに、高いだけのことはあるな、とぼんやりと感心する。

「佐伯さん、かなり腰がお疲れですね。股関節周りもかなり凝っているのです、これから下半身の血流を重点的に診ていきます」

「あ、はい……」

「少し失礼しますね」

そう言うと、施術師・神崎の手が、俺の施術着の腰の部分をつかき上げ、下着ごとゆっくりとずらし始めた。

（え……ちょ、まさか、全部脱ぐのか……？）

動揺で声を出そうとした瞬間、神崎の指が、俺の太腿の内側をかすめた。

「ん……ッ！」

自分でも驚くほど敏感に、身体がびくんと跳ねた。それと同時に、太腿の付け根から、じんわりと温かい液体が伝い落ちる感覚。

（え……これ、何だ……？ 俺、濡れて……？）

神崎の指が、俺の股の間—今まで意識したこともなかった割れ目に、そっと触れる。くちゅり、という小さな水音が、静かな施術室にやけに大きく響いた。

「……あの、これ……」

「ご心配なく。自然な生理反応ですよ。佐伯さん、ここがあなたの膣です。今日はこの部分の血流を良くして、骨盤内の老廃物を排出するマッサージを施しますね」

（膣……？ ここを、マッサージするのか……？）

まだ何も理解できないまま、俺の思考は置き去りにされ、神崎の指は慣れた手つきで俺の秘部をゆっくりと開いていった。

「初めての施術ですから、特に丁寧に行います。まずはご自身のお身体の状態を正しく知っていただくことが大切ですから」

神崎はそう言うと、ベッドの横のワゴンから潤滑オイルのボトルを手にとった。とぷり、と透明で粘性のある液体が、彼の長い指にたっぷりと注がれる。その一本一本の動きがやけに官能的で、俺の喉はごくりと鳴った。

（なんだこの男……無駄な動きが一切ない……）

神崎は高身長で、白衣の下の筋肉質な身体が動くたびに布地が張り詰める。低く落ち着いた声は、不思議と俺の警戒心を溶かしていく。だが、彼がベッドサイドに立ったとき、タオル越しに俺の腰に押し当てられた股間の質量に、俺の身体は恐怖と—それと同じだけの、期待で震え始めた。

（あ……これ、硬くなってる……。こんな太いものが……いや、施術だ、マッサージなんだ…）

「では始めます。力を抜いてくださいね」

耳元でそう囁くと、神崎はオイルをまとった指を、俺の窄まりへとゆっくりとあてがった。

神崎はまず、俺の膣口には触れず、周辺の外陰部全体にたっぷりとオイルを垂らした。ひんやりとした感触に、俺の腰がびくんと小さく跳ねる。

「まずは外側の血流から改善していきます。大陰唇、小陰唇、そして……」

神崎の人差し指が、俺のヒダの奥に隠れていた小さな突起に、そっと触れた。

「ひ、あ……ッ」

「ここが陰核、つまりクリトリスです」

神崎の指が、オイルを纏ってぬるりと粘膜を滑る。

「少し、失礼しますね」

断りを入れる彼の声とは裏腹に、その指の動きは容赦がなかった。

「ひ、あ……っ」

指の腹が、肥大してびくびくと脈打つクリトリスを捉え、骨の上からぐりぐりと押し潰す。その瞬間、先端から鋭い電流が走り、尾てい骨から背骨を駆け上がるような痺れに襲われた。

（なんだ、これ……っ、指が、めり込んで……ッ）

「だいぶ敏感になっています。ここは末梢神経が集中していますから、こうして圧をかけるだけで、脳へ直接信号が送られるんですよ」

神崎は冷静な解説を続けながら、人差し指と中指で俺のクリトリスを挟み込み、左右に小刻みに揺さぶり始めた。

「あ……っ、ん、あ……ッ！ あ……っ」

声を押し殺そうと奥歯を噛み締めるが、粘膜のざらつきをなぞるような繊細な刺激に、喉から熱い吐息が漏れ出す。

「我慢しなくていいですよ。身体の反応に素直になれば、より深くほぐれます」

神崎の指が、今度は爪の先でクリトリスの根元をかりかりと引っ搔くように弾いた。

「あ、んっ……！♡そこ、ひ、あぁっ……♡」

鋭利な快感に、窄まりがひくひくと指に吸い付くように震える。未開発だった突起が指の熱に煽られ、自分でも驚くほどパンパンに充血していく。指に押し返すような弾力を持つほどに肥大したそこを、神崎は手のひら全体で包み込み、円を描くようにじゅくりと圧迫した。

（あ、熱い……っ、腹の底が、きゅうきゅうする……っ）

クリトリスを潰されるたび、連動するように尿道の奥がきゅんと疼き、我慢できない尿意にも似た切ない快感が下腹部に溜まっていく。

「んんっ……！♡は、あ……っ、だめ、おかしく……なるっ……♡」

触れられただけなのに、突起の先端から電流が走ったような鋭い快感が背筋を駆け抜ける。自分の身体なのに、こんなところがあったのかーいや、あったとしても、なぜこんなに感じるのか。

「だいぶ充血していますね。ここは末梢神経が集中しているので、老廃物が溜まりやすい場所です。少し圧をかけて揉みほぐします」

そう言うと神崎は、親指と人差し指の腹で俺のクリトリスを優しく包み込み、ぐりぐりと円を描くように圧迫し始めた。オイルの滑りと熱い指の感触が、まだ誰にも触られたことのない突起を執拗に刺激する。

「あ……あっ……！ん……っ」

（なにこれ……気持ちいい……触られてるだけなのに、頭がぼーっとして……）

「声を我慢しないでください。リラックスしている証拠ですから」

神崎の指が動きを変え、今度は爪の先でクリトリスの根元をかりかりと引っ搔くように刺激し始めた。その繊細な動きに、俺の腰は勝手に揺れ、膣口からはとろりと蜜が溢れ出した。

「んあ……っ！あ、そこ、やさしく……っ」

「ここがあなたの性感帯です。まだ未開発ですが、定期的にほぐせば、より深いリラクゼーションが得られるようになりますよ」

（性感帯……俺の、クリトリスが……？）

自分の身体の未知の部分の部分を暴かれ、開発されていく。その恥辱と、抗いがたい快楽。俺は自分の意思とは関係なく、神崎の指を求めて腰を揺らし始めていた。

「まずは間接的な刺激に慣れてもらいましょう。包皮の上から、優しく圧をかけますね」

神崎はそう言うと、俺のクリトリスの包皮をそっと被せた。まだ誰にも触られたことのない突起は、薄い皮の下でびくびくと脈打っている。彼の人差し指が、その包皮の上から、ゆっくりと円を描くようにぐりぐりと押し潰し始めた。

「ん……っ」

直接触れられているわけではないのに、鈍くて深い快感がじわじわとクリトリスの根元に溜まっていく。包皮越しに伝わる指の熱と圧力。粘膜が擦れるような鋭さはないが、その代わりに、腹の底から込み上げてくるような持続的な疼きがあった。

（直接じゃないのに、なんでこんなに……っ）

包皮の下で、クリトリスがぷっくりと膨らんでいくのが自分でもわかる。布地のような薄い皮を内側から押し上げ、指の腹に押し返すほどに肥大していた。神崎はその反応を楽しむように、指の腹全体で包み込み、左右に小刻みに揺さぶり始める。

「あ……っ、ん、んん……っ」

声が漏れそうになるのを、奥歯を噛み締めて必死に堪えた。包皮越しにクリトリスが擦られるた

び、膣の奥がきゅんと疼き、入り口からはとろりと愛液が溢れ出して太腿を生温かく伝っていく。シーツに染み込む感覚が、羞恥をさらに煽った。

（だめだ、声、出る……こんなところ、触られてるだけなのに……ッ）

「力を抜いてください。間接的な刺激に身体を慣らすのも、施術の一環ですから」

神崎の冷静な声が、逆に俺の興奮を際立たせる。包皮の上からぐりぐりと押し潰され続けるうちに、クリトリスはさらに充血し、先端が布地を突き破ってしまいそうなほど硬く勃起していた。

「では、包皮を剥いて直接診せてください」

神崎の指が、包皮をゆっくりと押し下げていく。薄い皮が剥がされ、クリトリスが完全に剥き出しになった瞬間、外気に触れただけでびりびりと痺れるような過敏さが走った。

「あ……見ないで……ッ」

剥き出しのクリトリスは、さっきまで包まれていたせいで、驚くほど敏感になっている。空気の流れだけで、先端がひくひくと震え、触れられてもいけないのに尿道の奥がきゅんと疼いた。

「かなり充血していますね。直接、血流を確認します」

神崎の人差し指が、剥き出しのクリトリスにそっと触れた。

「ひ、う……ッ！」

さっきまでと同じ指なのに、その感触は全く違った。包皮越しの鈍い圧迫感ではなく、粘膜が直接こすられる鋭利な快感。指の腹のざらつきが、クリトリスの表面をなぞるたびに、背筋を電流が駆け抜ける。

（なにこれ……さっきまでと同じ指なのに、全然ちがう……ッ）

神崎は俺の反応を観察しながら、根元から先端まで、指の腹でゆっくりとなぞり上げた。クリトリスの裏側—もっとも敏感な一点を、わざとゆっくりと撫でられる。

「んぐ……ッ、は、あ……っ」

声を押し殺そうと、喉の奥で必死に唸る。唇を噛み締めすぎて、血の味がした。それでも、漏れ出る吐息までは止められない。

（ああ、もう、声、我慢できない……でも、こんな声、出たくない……ッ）

神崎の指が、今度はクリトリスの先端を爪の腹でそっと押し潰した。骨の上からぐりっと圧迫されると、内臓の奥まで響くような重い快感が走り、膣口からどろりと新たな蜜が溢れ出した。太腿はすでにぐっしょりと濡れ、シーツには愛液の染みが広がっている。

「んんっ……！ そこ、あ、やめ……ッ」

「やめないでほしいですか？ それとも、本当にやめますか？」

神崎が指を止め、俺の目をじっと見つめる。クリトリスは剥き出しのまま、空気に触れてひくひくと震えている。羞恥と、そして—もっと触れてほしいという抗いがたい渴望。

「……やめないで、ください……ッ」

俺は顔を背けながら、消え入りそうな声でそう答えるしかなかった。

むき出しのクリトリスに、神崎の指が直接触れる。さっきまでと同じ指のはずなのに、包皮越しとは比べものにならないほど鋭い快感が、尾てい骨から背骨を一気に駆け抜けた。

「ひ、あ……ッ♡ ちが、さっきと、全然ちが……ッ」

「当然です。包皮を剥くと、粘膜が直接刺激されますから。感度は数倍になりますよ」

神崎の指の腹が、根元から先端までをゆっくりとなぞり上げる。ざらりとした指紋の凹凸が、むき出しの粘膜を直接擦り上げていく感触に、俺の腰がびくんと跳ねた。

（ああ……俺のクリトリス、剥かれて……直接、触られて……ッ♡）

「少し形を確認しますね」

神崎はそう言うと、親指と人差し指で俺のクリトリスを摘まんだ。

「ひ、う……ッ♡」

潰されるのとは全く違う。引っ張られる—そんな未知の感覚に、思わず声が漏れる。クリトリスが指の間に挟まれ、軽く引き上げられる。根元からぐっと伸ばされるような伸長感。痛くはない。でも、引き伸ばされた粘膜が過敏に空気を感じ、びりびりと震えているのが自分でもわかった。

「のびちゃ……ッ♡ それ、やめ……ッ」

「大丈夫です。形を確認しているだけですから。とても健康な形状ですよ」

神崎は摘まんだまま、クリトリスを左右に小刻みに揺さぶり始めた。それだけで尿道の奥がきゅんと疼き、膀胱のあたりに甘い痺れが広がっていく。我慢できない尿意にも似た切迫感—Gスポットを圧迫されたときと同じ、でももっと鋭くて直接的な快感。

「んくッ……♡ あ、それ、だめ……おしっこ、したくな……ッ♡」

「尿道とクリトリスは神経が近接していますから。ここを刺激されると、尿意にも似た感覚が生じるんですよ」

神崎の冷静な解説とは裏腹に、俺の膣口からはとろりと愛液が溢れ出し、シーツにぼたぼたと染みを作っていく。摘ままれ、揺さぶられ、引き伸ばされたクリトリスは、自分のものとは思えないほどパンパンに充血し、指に押し返すような弾力を持ち始めていた。

（摘まむだけで、こんなに……ッ♡ 俺のクリトリス、先生の指に、挟まれて、可愛がられて……ッ♡）

「先端のこの部分、特に神経が集中しています」

神崎は摘まんだクリトリスを解放すると、今度は人差し指の爪の先で、先端の一点だけをかりかりと引っ掻いた。

「ひ、あ……ッ♡ そこ、だめ……ッ！」

広範囲の圧迫とは全く違う。ピンポイントで突き刺さるような鋭利な快感。爪の先がクリトリスの先端を引っ掻くたび、尿道の奥がきゅんきゅんと痙攣し、下腹部に甘い熱が溜まっていく。

「ここが一番感じるでしょう。陰核亀頭と呼ばれる部分で、神経が最も集中しています」

「あゝ……ッ♡ そこばっか、かりかり……ッ♡」

爪の先が、クリトリスの先端だけを執拗に引っ掻き続ける。そのたびにクリトリスはさらに肥大し、色を濃くしていく。神崎の指に押し返すほど硬く勃起した自分の突起—それが、視界の端でびくびくと脈打っているのを、俺ははっきりと見てしまった。

（俺のクリトリス……こんなに、大きくなって……ッ♡）

恥ずかしい。なのに、目が離せない。神崎の指に弄ばれる自分のクリトリス—ついさっきまで小さく隠れていたはずの突起が、今は醜く肥大し、先生の爪先に蹂躪されている。

「さあ、そろそろ仕上げましょうか」

神崎はそう言うと、今度は手のひら全体で俺のクリトリスごと恥丘全体を包み込み、ぐりぐりと円を描くように圧迫し始めた。潰す、撫でる、揺さぶる—三つの刺激が同時に襲いかかる複合的な快楽。

「あゝ……ッ♡ も、もう、無理……ッ♡」

クリトリスが自分の意思とは関係なく激しく脈打ち、膣がきゅうきゅうと締まる。尿道の奥から熱いものが込み上げてきて、潮が噴き出しそうになるのを必死に堪えた。
「仕上げて、全体をほぐしますね」

神崎はそう言うと、これまでのように指先だけでなく、手のひら全体を大きく開き、俺のクリトリスごと恥丘全体を包み込んだ。

「あ……ッ」

温かい掌底が、骨盤の縁を覆う。人差し指と中指の股にクリトリスを挟み込みながら、手のひら全体でぐりぐりと円を描くように圧迫し始めた。潰す、撫でる、揺さぶる—三つの刺激が同時に襲いかかる。指先だけの局所的な快感とは全く別の、骨盤ごと揺さぶられるような重く深い圧迫感が下腹部全体に広がっていく。

「ん、あゝ……ッ♡ なに、これ……広がって……ッ」

「手のひら全体で圧をかけると、皮下の血管床が一気に開放されます。クリトリスだけでなく、周辺の神経叢全体が刺激されるんですよ」

（クリトリスだけじゃない……全部、全部、手のひらに包まれて……ッ♡）

神崎の掌底が時計回りにぐりぐりと回ると、恥丘全体が熱を帯び、その中心でクリトリスが自分の意思とは関係なく激しく脈打つ。肥大した突起は手のひらの窪みにぴったりと収まり、神崎の手の動きに合わせて形を変え、潰され、撫で回される。膣の奥の子宮口までもがきゅうきゅうと締め、身体の内側から何かが込み上げてくる—。

「あゝ……ッ♡ も、もう、無理……ッ♡ でる、でちゃ……ッ♡」

「まだです。ここで一度こらえることで、次の内部施術の効果が上がりますから」

（まだ、我慢しろって……？ これ以上、我慢したら……ッ♡）

尿道の奥がきゅんきゅんと痙攣し、潮が噴き出しそうになるのを必死に堪える。その必死の形相を見透かすように、神崎の手のひらはさらに圧を強め、クリトリスを恥骨ごとミシミシと押し潰した。視界が白く滲み、太腿の内側がガクガクと震える。

神崎は片手で、近くにあったワゴンから小型のローターを取り出した。シリコン製の先端は指先ほどの大きさで、細かな凹凸がついている。

「ここからは器具を使って、より深く血流を促進します。まずは軽い振動から」

スイッチが入る。低い駆動音。ローターの先端が、神崎の手によって俺の剥き出しのクリトリスにそっと押し当てられた。

「ひ、あ……ッ♡」

指とは全く違う。細かく震える振動が、クリトリスの先端から根元までを休みなく刺激する。粘膜がぶるぶると震え、その震動が尿道の奥まで響いてきゅんきゅんと痙攣を引き起こした。

「あゝ……ッ♡ なにこれ、指より、ずっと……ッ♡」

「振動は血流促進に非常に効果的です。少し強度を上げますね」

神崎がダイヤルを回すと、振動が一段階強くなった。ぶぶぶ、という音が施術室に響く。クリトリスの先端に集中していた振動が、恥丘全体に広がり、骨盤ごと揺さぶられているような錯覚に陥った。

「んぐッ……♡ あ、あゝ、あゝ……ッ♡ せんせ、これ、つよ……ッ♡」

「まだ三段階ありますよ。どこまで耐えられますか」

（これ以上……？ もう無理なのに……ッ♡）

振動がさらに強くなる。クリトリスが自分の意思とは関係なく激しく脈打ち、膣がきゅうきゅうと締まる。尿道の奥から熱いものが込み上げ、潮が噴き出しそうになるのを必死に堪えた。

「あ……ッ♡ もう、でる……でちゃ……ッ♡」

「では、一度ここで解放しましょうか」

神崎がローターをクリトリスの先端にぐっと押し付けたまま、強度を最大にした。

「あっ——！！♡♡」

潮が勢いよく噴き出す。尿道を熱いものが駆け抜け、シーツに大きな染みが広がった。全身がガクガクと痙攣し、俺は白目を剥いて舌をだらりと垂らした。

（ローターで……クリトリスだけで、イカされた……ッ♡）

ぐったりとベッドに沈み込む俺を見下ろしながら、神崎は静かにローターを置いた。

「いい反応です。では、次は粘膜の状態を舌で確認します」

「……舌……？ え、ちょっと、それって……」

俺が戸惑う間もなく、神崎はベッドの端にしゃがみ込み、俺の両脚を肩に担ぎ上げた。そして、ぐっしょりと濡れそぼった俺の秘部に、その端正な顔を近づける。

「失礼します」

生温かい吐息が、敏感になったクリトリスにかかったかと思うと、神崎の舌がねっとりと俺の割れ目を根元から先端まで舐め上げた。

「ひうッ……！♡ あ、あ……ッ」

舌のざらざらした表面が、クリトリスの先端を直接くすぐる。ローターとも指とも全く違う、粘着的で柔らかく、しかし確かにざらついた感触。脳が焼き切れそうな快感に、俺はベッドの端をぎゅっと握りしめ、背中を大きく反らせた。

（舌……先生の舌が、俺のクリトリスを……ッ♡）

「ん……ちゅ……れろ……っ」

神崎は無言で、クリトリスの根元を唇で優しく食み、先端を舌先でちろちろと弾いた。その間も、彼の目は俺の表情をじっと観察している。見られている。舐められている。こんなに恥ずかしいことを、じっくりと。

「ん、んんっ……！♡ あ、やめ……舐めちゃ、きちゃな……ッ♡」

「汚くありませんよ。とても健康的な粘膜です。味も正常です」

神崎は淡々とした口調でそう言うと、再び舌を俺のクリトリスに這わせた。先端を舌でくるくると円を描くように舐め、根元を唇で吸い、尿道口のすぐ上のくぼみを舌先でほじるように刺激する。

「あ……ッ♡ そこ、舌、入って……ッ♡ せんせ、それ、ちが……ッ」

「尿道口のすぐ上の部分です。ここは特に敏感でしょう」

（そんなところまで……舐められてる……ッ♡ 俺のクリトリス、先生の口の中で……ッ♡）

神崎の舌がクリトリスの先端を捉え、ちゅうっと音を立てて吸い上げた。

「あっ——！！♡♡」

その瞬間、先ほどとは比べものにならない深い絶頂が襲いかかった。潮が再び噴き出し、神崎の顔にかかるのも構わず、俺は白目を剥いて、舌をだらりと垂らした。神崎は顔にかかった潮を手の甲で拭いながら、静かに立ち上がった。

「十分にほぐれました。では最後に、仕上げの器具を使います」

神崎がワゴンから取り出したのは、先端が丸く膨らんだシリコン製のバイブレーターだった。先端には小さな吸盤のようなリングがついている。

「これは振動と吸引を同時に行える器具です。クリトリスに特化した施術で、外陰部全体の血流を最終的に整えます」

「きゅういん……まだ、そんなことできるんですか……？」

「ええ。ご安心ください。痛みはありません」

神崎はバイブの先端を、俺のクリトリスにそっと被せた。シリコンの柔らかなカップが、肥大した突起を優しく包み込む。

「では、まず振動だけ入れます」

スイッチが入る。ローターより深く、重い振動がクリトリス全体を包み込んだ。ぶつぶ、という低い音。突起がカップの中で震え、その振動が恥丘全体に響き渡る。

「あゝ……ッ♡ これ、さっきのローターより、ずっと……ッ♡」

「ええ。これは医療用ですから、より深部まで振動が届きます。では、吸引も加えます」

神崎がもう一つのスイッチを押す。くちゅ、という小さな水音。カップの中の空気が抜かれ、クリトリスが優しく吸い上げられた。

「ひ、あ……ッ♡ なに、これ……吸われて……ッ♡」

振動で震えながら、吸引で吸い上げられる。二つの刺激が同時にクリトリスを蹂躪し、尿道の奥から子宮口までがきゅうきゅうと痙攣した。

「吸引によって血流が一気に集まります。もう少し強度を上げますね」

「あゝ……ッ♡ せんせ、も、もう……イかせて……ッ♡ お願い……ッ♡」

「では、最後に振動と吸引を最大にします。一気に排出してください」

神崎がダイヤルを回し、バイブの強度が最大になる。クリトリスはカップの中で吸い上げられ、ぶるぶると激しく震え、先端が千切れそうなほど充血している。

「あゝ——！！♡」

三度目の潮が噴き出す。尿道を熱いものが駆け抜け、シーツはすでにびしょびしょだ。全身がガクガクと激しく痙攣し、俺は白目を剥いて、舌をだらりと突き出した。意識が遠のく。

（クリトリスだけで……三回もイかされた……ッ♡ もう、何も考えられない……ッ♡）

神崎がゆっくりとバイブを外すと、剥き出しのクリトリスは真っ赤に充血し、まだびくびくと脈打っていた。空気に触れるだけで過敏に震え、じんじんと熱を持っている。

「素晴らしい反応です。外陰部の血流は完全に改善されました。では、これから内部の施術に移ります」

（まだ……内部……？ 俺、外だけで、もうぐちゃぐちゃなのに……ッ♡）

俺は荒い息を繰り返しながら、次の施術—Gスポットへの指の挿入を、涙目のまま待ち受けていた。太腿は愛液と潮でぐっしょりで、シーツはもう絞れるほど濡れている。それでも、腹の奥はまだもっと、もっと、と疼き続けていた。

「いい反応です。外陰部の血流は十分に改善されました。では、そろそろ内部の施術に移りましょう」

神崎がようやく手を離すと、俺のクリトリスは燃えるように熱く、まだびくびくと脈打ち続けていた。先端は真っ赤に充血し、包皮が完全に剥かれたまま、空気に触れてひくひくと震えている。恥丘全体がじんじんと熱を持ち、手のひらの圧迫の余韻がまだ骨の奥に残っていた。

太腿は愛液でぐっしょりで、シートには大きな染みが広がっている。それでも、まだ内部には指が入っていない。これだけ感じて、まだ奥がある。

（まだ……これから、内部が……？ 外だけでこれなのに、中に指が入ったら、俺……）

荒い息を繰り返しながら、俺は次の施術—Gスポットへの指の挿入を、恐怖と、それ以上の期待で待ち受けていた。神崎が新しいオイルを手に取り、たっぷりと指に垂らす。ぬらぬらと光るその指が、今度は俺の膣口へとゆっくりと近づいてくる。
「いい反応です。では、そろそろ内部の施術に移りましょう」

神崎の指がようやくクリトリスから離れたときには、俺の突起は燃えるように熱く、まだびくびくと脈打ち続けていた。太腿は愛液でぐっしょりで、シートには大きな染みが広がっている。

（まだ……残ってる……？ これだけ感じたのに、まだ奥があるのか……ッ♡）

俺は荒い息を繰り返しながら、次の施術—内部への指の挿入を、恐怖と期待の入り混じった目で待っていた。

「では、内部の施術に移ります。少し奥に入りますが、力を抜いてくださいね」

神崎の指が、ついに濡れそぼった膣口に触れた。クリトリスへの刺激でたっぷりと溢れた蜜とオイルが混ざり合い、窄まりはとろりと柔らかく、指を受け入れる準備ができている。

ぬるり、と人差し指が沈み込んでくる。

「あ……ああ……ッ」

初めて入ってくる異物の圧迫感。膣壁を押し広げられる感覚に、息が詰まる。しかし、痛みはない。むしろ、待ち望んでいたものがようやく来たような充足感が、腹の奥をじんわりと満たしていく。

「ここまでは問題ないですね。では、もう少し奥へ」

神崎の指がさらに深く進み、第二関節、そして根元まで埋め込まれた。そのとき、指の腹が膣の前壁—腹側にあるざらざらした部分を、ぐっ、と押し上げた。

「んんっ……！♡ あ、そこ……何か……ッ」

「ここがGスポットです。尿道海綿体に包まれた、非常に血流が滞りやすい場所です。しっかり圧迫して老廃物を流しますね」

（Gスポット……？ そんなの、初めて聞いた……なのに、そこ触られると、変な感じが……ッ♡）

神崎の指が、ざらざらした部分を狙ってぐりぐりと圧迫する。単なる異物感ではなく、内側から直接、尿意にも似た切ない快感が込み上げてくる。俺の腰は意思とは無関係に跳ね上がり、神崎の指をさらに奥へと誘い込もうとしていた。

「あ……ッ♡ そこ、やめ……へんな、感じ……ッ」

「大丈夫ですよ。気持ちいいという正常な反応です。むしろ、もっと強く押した方が老廃物が流れますから」

神崎の指が、ざらざらしたGスポットをぐりぐりと圧迫する。二本の指で挟み込まれ、ゆっくりと抜き差しされるたびに、ぐぼ、くちゅ、と愛液とオイルが泡立つ音が施術室に響いた。

「あ、あ、あ……ッ♡ なんか、おしっこしたく、なって……ッ♡」

「それはいい反応です。そのまま、我慢せずに出していいですよ。それが骨盤内の老廃物ですから」

（これ……出ちゃう……出ちゃう……ッ♡）

俺は必死に尿道を締めようとしたが、神崎の指がGスポットを押し込むたび、締めりは緩んでいき、太腿の内側を生温かい液体が伝い始めた。

「あゝ……ッ♡ も、もう、漏れ……ッ」

「まだ我慢してください。溜め込んでから一気に排出した方が、より深いリリースになります」

神崎はそう言うと、膣内の指を抜かずに、もう片方の手を俺の下腹部—膀胱のすぐ上に置いた。そして、ぐっ、と上から圧迫した。

「ひ、うゝ……ッ♡ そこ、押さないで……ッ♡」

「膀胱の上から圧をかけると、Gスポットへの刺激が増幅されます。さあ、そろそろ解放しましょうか」

神崎の指がGスポットをさらに強く押し上げ、下腹部への圧迫と同時に、ぐりぐりと執拗にノックし始めた。内側と外側、両方から責め立てられる。尿道の奥がきゅんきゅんと痙攣し、腹の底から熱いものが込み上げてくる—もう、抑えられない。

「あゝ——！！♡♡」

視界が真っ白に染まる。尿道を熱いものが勢いよく駆け抜け、潮が噴き出した。透明な飛沫がアーチを描いてベッドの下を叩く。ぴしゃああ、という水音が、やけに遠くから聞こえる。

（出てる……俺の潮……先生の指で、Gスポットだけで……ッ♡）

全身がガクガクと痙攣し、俺は白目を剥いて、舌をだらりと垂らした。潮はまだ止まらず、びちゃびちゃと床を濡らし続けている。どれだけそうしていたか、ようやく潮が止まると、俺の身体はマリオネットの糸が切れたようにぐったりとベッドに沈み込んだ。

「いい排出量です。骨盤内の老廃物がしっかりと流れました」

神崎はゆっくりと指を引き抜き、俺の腹を優しく撫でた。太腿や腹は痙攣の余韻でまだぴくぴくと震え、膣は指の形を覚え込むようにきゅうきゅうと締まっている。

「では次に、粘膜の状態を舌で確認します」

（まだ……あるのか……？ 今ので、もう死ぬほどイったのに……ッ♡）

俺は荒い息を繰り返しながら、次の施術—クンニを、涙とよだれでぐしょぐしょの顔のまま待ち受けていた。